東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

IBの取り組み その２：新学習指導要領「主体的に学習に取り組む態度」の評価実践例

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上岡, 史佳, 久保, 達郎, 小林, 万純, Ben, Smith, 手塚, 史子, 徳, 初美, Troy, Hammond, 前田, 健士 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00180048

国際中等教育研究　第16号 p.169 ～ 178
東京学芸大学附属国際中等教育学校研究紀要

IB の取り組み　その２

―新学習指導要領「主体的に学習に取り組む態度」の評価実践例―

An Approach to IB Part 2

－Assessments Examples for New Curriculum Guidelines for “Active Attitude toward Learning”－

外国語科　上岡 史佳　久保 達郎　小林 万純　Ben Smith
手塚 史子　徳 初美　Troy Hammond　前田 健士

１章　はじめに

１節　学習指導要領の改訂

2017 年 3 月には中学校学習指導要領が改訂され，2021 年度から全面実施となっている。2018 年 3 月には高等学校学習指導要領が改訂され，2022 年度より年次進行で実施されている。どちらにおいても，生徒に必要な力が三つの柱として整理された。これに伴って，評価観点も全教科で共通して，「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の三つに変更された。改訂される前の学習指導要領では，「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」を基本とし，外国語科（英語）の評価観点は「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」「表現の能力」「理解の能力」「言語や文化についての知識・理解」という四つであった。新旧の観点を比較すると，今回の改定によって外国語科にとってはとても大きな変化がもたらされたということができる。また，高等学校でも初めて観点別評価が導入され，高等学校の現場では戸惑いがあるのではないかと推測される。

新学習指導要領の三つの観点と，旧学習指導要領の四つの観点を比較すると，「知識・技能」と「思考・判断・表現」については，組み合わせが変わったものの，以前のものと大きく差は無いように見受けられる。一方で，「主体的に学習に取り組む態度」については，態度をどのように評価していけばよいのかという課題も挙げられる。文部科学省国立教育政策研究所によると，この観点を評価する際には，「単に継続的な行動や積極的な発言を行うなど，性格や行動面の傾向を評価するのではなく」，「知識及び技能を習得したり，思考力，判断力，表現力等を身に付けたりするために自らの学習状況を把握し，学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら，学ぼうとしているかどうかという意志的な側面を評価することが重要である」とされている [1)]。

こうしたことを背景として，本校外国語科でも，特に後期課程（高校１年生）において，三つの観点の評価を国際バカロレア（以下，IB）の観点別評価と齟齬の無いように実施していかなければならない。本稿では，「主体的に学習に取り組む態度」を評価するにあたり，１年間にわたって試行錯誤を繰り返してきた記録を残すことを主たる目的とし，適切に評価活動が行えていたか否か今後検証を進めていく予定である。

[1)] 文部科学省国立教育政策研究所：「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 高等学校 外国語, p.10（2021）

２節　本校外国語科における習熟度別クラス展開と Effort 評価

本校外国語科の授業は，生徒の英語習熟度に応じてクラス分けを行っている。前期課程（中学１年～３年）では，本校に入学してから英語学習を始める生徒は Core クラスに，入学以前に在外歴のある生徒や，国内のインターナショナルスクール出身等の生徒は Advanced クラスに所属している。Core クラスは日本人教員２名が担当し，Advanced クラスは日本人とネイティブの教員が担当している。

後期課程においては，４年（高校１年）までは IB の中等教育（MYP）プログラムを受けることになっている。英語習熟度と生徒の希望を踏まえて，３クラス（Core, Basic, Advanced）に分かれて学習を進める。Core, Basic クラスは日本人教員が担当し，Advanced クラスはネイティブ教員が担当している。５年（高校２年）以降は，ディプロマ（DP）プログラムに所属する生徒以外は，複数の講座の中から各自の希望で授業を選択して履修している。

本校は IB 認定校であり，国立大学の附属学校でもある。IB の示す Language Acquisition のガイドに則った評価を行うとともに，学習指導要領にも沿う必要がある。IB では四つの観点（A: Listening, B:Reading, C:Speaking, D:Writing）が示されているが，その中に「主体的に学習に取り組む態度」に相当するような評価項目は存在しない。そこで本校外国語科では，独自に観点 E: Effort を設定して生徒の取り組みを継続的に評価している。ただし，観点 E:Effort が，文部科学省の示す「主体的に学習に取り組む態度」と一致するものとは言い切ることはできず，今後さらなる検討が必要となる。

（文責：久保達郎）

２章　「主体的に学習に取り組む態度」の評価実践例

１節　１年生（中学１年生）の実践

１学年では英語に楽しんで親しむこと，習慣的に学習を続ける仕掛けになること，それぞれのレベルに合った学習を進めることを目標とし，その活動を Effort として成績に加算している。その一部として以下の例を挙げる。①のアルファベットポスターに関しては，入学最初の課題として，自分が担当するアルファベット文字について，日本語もしくは英語でその起源を調べて，わかりやすくまとめる（発信する）ものである。言語学習・言語習得の観点からは他の課題と異なるが，学習を始めるスタートとしては大きな動機付けになっており，これをもとによりよい発信方法（Visual Aids の作り方や構成）の学びのきっかけとしている。校内でも展示会を行っている。

① アルファベットポスター（創作活動）（図１）

② Speaking Reflection（録音したものの振り返り，毎時間）（図２）

③ キーワーク文法問題集（レッスンが１つ進むごとにノートを提出）

教科書のユニットごとの小テストとノート提出を，ユニット終了時に行う。長期休みにはその学期で終了した範囲を書き込み，復習を行う。４段階（４ 解き直し，分析，解説までできている，３ 一部不十分，２ 丸つけのみ，１ 解いただけ，０ 未提出もしくはほとんど未完成）で自己評価を書いたのち，教師で最終判定する。

④ 自主学習ノート・E-card（英語に関する自主的な学習を進める）（図３）

自主的に好きなテーマを決めて学習を進めるものである。ノートが筆記，E-card が口頭で行うものである。

筆記の場合は歌詞やスピーチ，ニュースなどを選択する生徒もいれば，興味関心に合わせて単語のジャンルを決めて学習する生徒もいる。また，文法の復習や教科書の本文や単語の学び直しなど，それぞれの生徒が選択できるため，多岐にわたる。ページ数でＥに加算する。

E-card は教師とスピーキングをすることでシールを獲得し，集めていくものである。トピックは生徒に任されている。シールの台紙を学期末に回収し，Ｅに反映させる。

⑤　単元の振り返り（単元終了時）

スキルの振り返りだけではなく，単元でどのような探究をしたか，概念理解が深まったか，そして学習者としてどう変わったか，振り返りを行う。２学期のユニットでは A3 用紙１枚分の振り返りを実施。びっしり余白まで埋める生徒もいた。

・　問いの例：今回の課題で一番心がけ，練習，対策を行ったことは何か。上手くいった点，いかなかった点は何か。音声データを聞き，練習を重ねるごとにあなた自身はどのように変化したか。ルーブリックで評価すると何点になるのか，なぜか。探究の問いの答えは何か。プロジェクトの学びで印象に残ったものは何か。IB のキーワード（ATL，10 の学習者像，グローバルな文脈，重要概念，関連概念）とのつながりは何か。

・　生徒の回答例：Can we know a person’s identity from food?　（探究の問い）

「食べる」と言う行動は生活の中の一つである。食べ物は，その人自身の好みや食べる量，信じている宗教，住んでいる地域など，幅広い情報を多く知ることができるからだ。（略）実際に授業でも，インドに住む人の３食から，住んでいる地域の特徴や菜食主義のことなどを学ぶこともできた。

図１　①の例

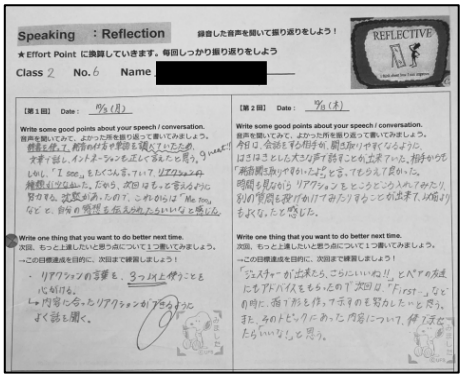

図２　②の例

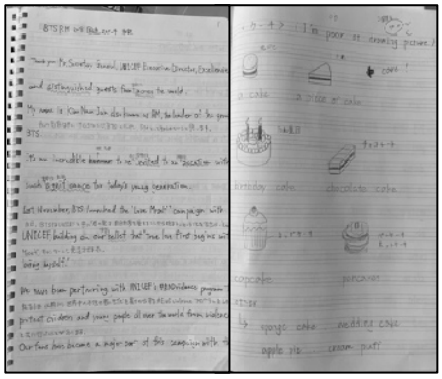

図３　④の例

（文責：小林万純，手塚史子）

２節　２年生（中学２年生）の実践

２－１　Core クラス

文部科学省国立教育政策研究所によると，「主体的に学習に取り組む態度」は，「思考・判断・表現」と一体的に評価することができるとされている[2)]。また，中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説外国語編でも，生徒が身に付けるべき資質・能力として，「外国語の背景にある文化に対する理解を深め，聞き手，読み手，話し手，書き手に配慮しながら，主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」と述べられている。したがって，筆者の基本的な評価方針としては，これら二つの観点に同じ評価が付くことを想定している。

本稿の冒頭でも述べたように，挙手や発言の回数，課題などの提出状況といった行動面や性格面をもって評価を行うのではなく，生徒が学習を自ら調整するような姿を積極的に評価していきたいと考えている。「主体的に学習に取り組む態度」は，他の評価観点と同様に，長い時間をかけて育まれるものである。したがって，評価のタイミングが重要な意味を持つと考えている。

筆者が担当している２年生の Core クラスでは，短期・中期・長期と三つのスパンに分けて「主体的に学習に取り組む態度」を評価している。それぞれの時期の評価は目的が異なっているため，学期初めや評価課題実施時に，生徒に十分に説明し，共通認識を持つように心掛けている。

短期的な評価例として定期的な課題提出や小テストの実施などが挙げられる。文法演習用の課題や，多読を目的とした Reading Log，まとまった量の英文を書く English Journal などを定期的に生徒に課し，フィードバックを返すように努めている。これらの課題はその特性から，本校独自の観点 E:Effort として集計している。これらの課題の状況をもって「主体的に学習に取り組む態度」を評価しているわけではないことを強調したい。

中期的な評価の例として単元末評価課題が挙げられる。一定の時間をかけて一つの単元に取り組み，その学習の成果を評価している。筆記テスト・パフォーマンステストの両方において，その単元での学習を総括できるような出題をするように心掛けている。また，生徒に物事を自分事ととして捉えてほしいという願いから，「もし自分が同じ立場に立つことになったら」という趣旨の問いを投げかけることが多い。例えば，１学期から２学期にかけて The Phantom of the Opera[3] に取り組んだ際には，「登場人物と同じ境遇に立たされた時にどうやって生きるのか」ということを問うた。生徒の解答には，登場人物と自分の人生を重ねて考えたり，物語とは違った生徒独自の視点から語られているものも多く，単元での学びが表出していると考えている。

長期的な評価として Reflection Card（学期の振り返り）を実施している。各学期での学びを総括することを主たる目的としている。中期的な評価と重複するような部分もあるが，より広い視野で自身の学びを振り返ることができることに加え，学期末に振り返りを行うことで，長期休暇などを使って学習の進め方などを調整し，新学期の学習に役立てることができると考えている。

こういった評価課題をスパイラル的に実施することにより，「主体的に学習に取り組む態度」を養うことができるのではないかと期待している。新学習指導要領が実施されてから日が浅く，評価の実践例もまだあまり多くない。現状の評価活動を継続させていくとともに，より良い評価活動へ昇華させられるように検証を行っていきたい。

[2] 文部科学省国立教育政策研究所:「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校 外国語, p.79（2020）
[3] Gaston LeRoux: The Phantom of the Opera, Oxford University Press （2007）

（文責：久保達郎）

２－２　Advanced クラス

I (Hammond) used several tools throughout the trimester to derive each student's effort score. Separate scores out of 8 were calculated for five elements:

1. Class participation
   – Every time a student participates in class discussion, a point is awarded.

- The maximum points for each class session are tallied over the course of the semester to form the denominator.
- Individual cumulative participation scores form the numerator.
- Percentages are calculated for each student.
- The square root of each student's percent score was multiplied by 8.

2. Weekly vocabulary homework
   - Completion of these worksheets was tallied for a percentage.
   - The square root of each student's percent score was multiplied by 8.
3. Vocabulary flashcards
   - In addition to assigned vocabulary, students created flashcards with unfamiliar vocabulary they encountered in the course of their reading, viewing, and other exposures to English.
   - These cards were counted and assessed on the following scale:

     4 (>45 cards)
     3 (30-45 cards)
     2 (16-30 cards)
     1 (1-15 cards)
     0 (0 cards)
   - Scores were doubled to yield a score out of 8.
4. Extensive reading log
   - Students were expected to read books of their choice for 30 minutes per night and keep a record of their start time, end time, number of pages and approximate words per page using an excel file in Microsoft Teams.
   - The number of logs entered was tallied and assessed against the number of days available in the term to yield a percentage.
   - The square root of each student's percent score was multiplied by 8.
5. Towards the end of the term, each student completed a reflection sheet.

Sample reflection sheet (front and back by different students). （図 4）

Each student's final score of 8 is my professional judgment of the best fit from the 5 effort scores I collected over the course of the term. Because two teachers share the English Advanced class, the two teachers' 6 effort grades (2 teachers x 3 terms) are averaged to obtain each student's final effort grade for the year.

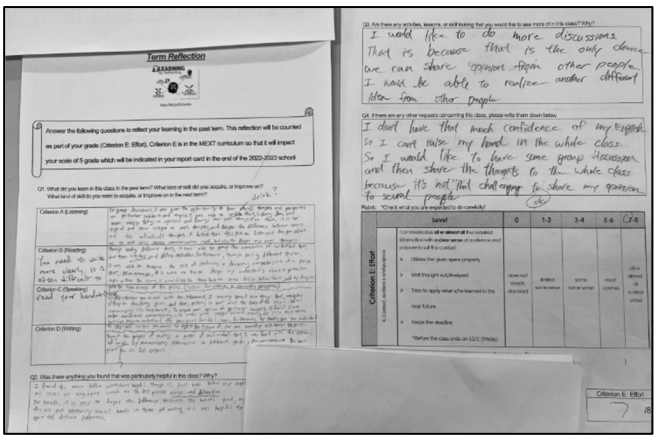

図 4　Reflection sheet の例

（文責：Troy Hammond）

３節　３年生（中学３年生）の実践

３－１　Core クラス

Core クラスにおいては文部科学省の検定教科書を中心に授業をするものと，洋書を中心に授業をするものを二人の教員でそれぞれ担当している。以下はそれぞれの担当に関するものである。

＜文部科学省検定教科書中心の授業＞

Key ワーク

検定教科書で扱う新出文法事項については，授業での取り組みに加えて家庭学習として問題集に取り組むことで定着を図っている。そのため，ユニット終了ごとに課題を提出することとしており，繰り返し学習ができるようにノートに解答を書くように指示している。評価については，教科で共有している点数基準を用いて行った。具体的には，期日までに範囲の学習を終えてノートを提出していることを基準とし，その上で「解き直しや分析・解説など，後日ノートを見返した際に自分自身が参考になる点」等の記載がある場合には，より高い評価とした。

＜洋書中心の授業＞

以下の①～③は Effort として評価する課題の例である。

①インタビューテストの振り返り

インタビューテスト後の自己評価，準備・テスト本番・今後に向けての振り返り（図 5）

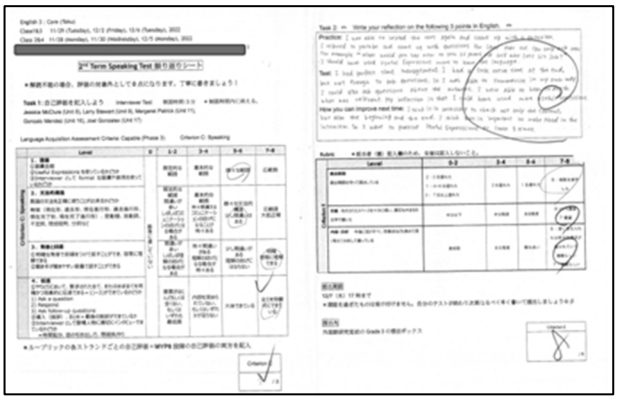

図 5　①の例

②インタビューテストの音声データ提出

授業に対する取り組みとして，①と抱き合わせて算出。提出期限を設けて，それを守っているか否かで評価。

③洋書（“*Chocolate*[4]”, “*The USA*[5]”など）を読んで作成するリーディングログ

事前にガイドラインを示して授業のスケジュールを共有し，毎回授業の開始の時間を使ってチャプターごとにその場で評価を出した。生徒は全員分の評価が終わるまで授業の準備や内容確認後に行われるテストの準備を行う。1 冊終わるたびに全体をまとめたものを回収し，総合評価を出している。このスタイルを取っているため，改善点は個別に伝えることができており，それに基づく主体的な取り組みを評価することができ，生徒は継続的に取り組んだものが段階的に進展してより良いものになるという実感を得ることもできているものと思われる。（図６～９）

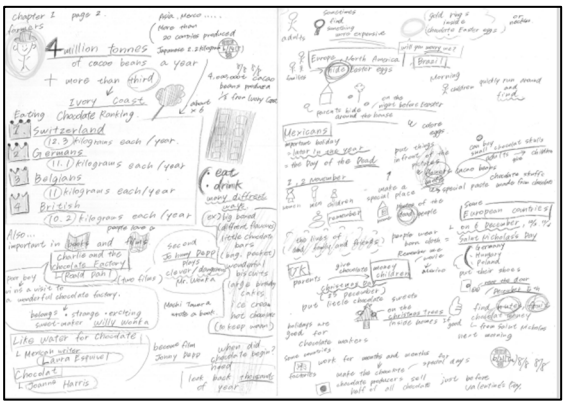

図 6　③“*Chocolate*”　Reading Log の例

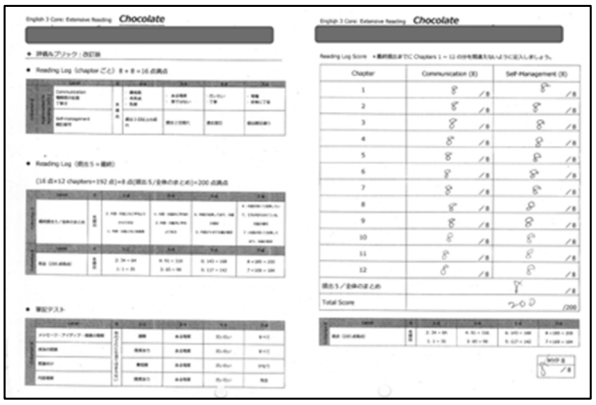

図 7　③“*Chocolate*”　Rubrics & Score Report の例

図 8　③“*The USA*”　Reading Log の例

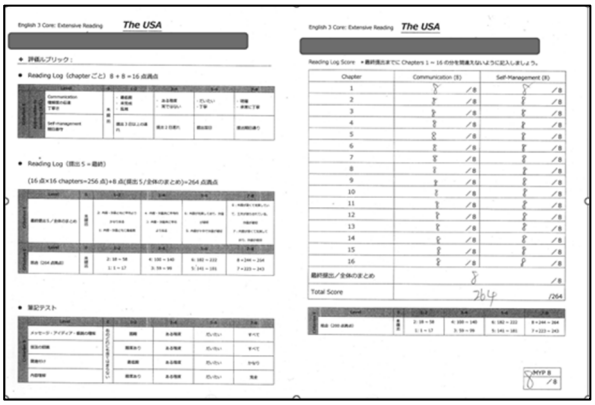

図 9　③“*The USA*”Rubrics & Score Report の例

[4] *Chocolate*, Janet Hardy-Gould, Oxford University Press, 2011, Oxford Bookworms Library Stage 2

[5] *The USA*, Alison Baxter, Oxford University Press, 2008, Oxford Bookworms Library Stage 3

（文責：上岡史佳，徳初美）

3－2　Advanced クラス

The advanced class was taught by two teachers, one covering Speaking and Listening, the other covering Reading and Writing. The Effort grade was based on 1) students' in-class participation, 2) submission of assignments, and 3) end of term reflections.

1)　Students were scored based on how often they made contributions to class discussions and participated in group discussions.

図 10　ポスターの例

2) Students who repeatedly failed to submit assignments, or submitted assignments that did not meet requirements (e.g. late, below word count) had points subtracted.
3) End of term reflections consisted of posters for the first term and questionnaires for the second term. (See above for sample.)（図 10）

The final grades awarded by the two teachers were averaged and rounded up or down according to the best fit.

（文責：Ben Smith）

４節　４年生（高校１年生）の実践

４年生は習熟度別で３展開に分かれており，Core・Basic においては教科書内容に加え，Authentic な独自教材を使った授業，文法演習などを行っている。

以下の①～⑤は Effort として評価課題としているものの一部である。それぞれに評価に関するルーブリックがあり，内容の充実度・思考の深まり・提出期限など観点に応じて８段階で評価をつけている。ルーブリックは生徒に事前に配布し，共有している。

授業進度にもよるが，①③は毎週，②④は単ごと⑤は学期ごとにある程度の頻度で提出を促し，継続的かつ主体的な取り組みを評価している。

これにより，授業への参加度・学びへの態度・継続的かつ自主的な学習を客観的に数値化して評価できるよう努力している。

① Essay 添削　（図 11）
② 各 Unit ごとの Summary と Reflection Essay　（図 12）
③ 文学作品　Reading log　（図 13）
④ 文法演習問題の要点まとめや演習問題の取り組み　（図 14）
⑤ 学期ごとのポートフェリオ作成や Reflection Essay, Report Card 一覧　（図 14～16）

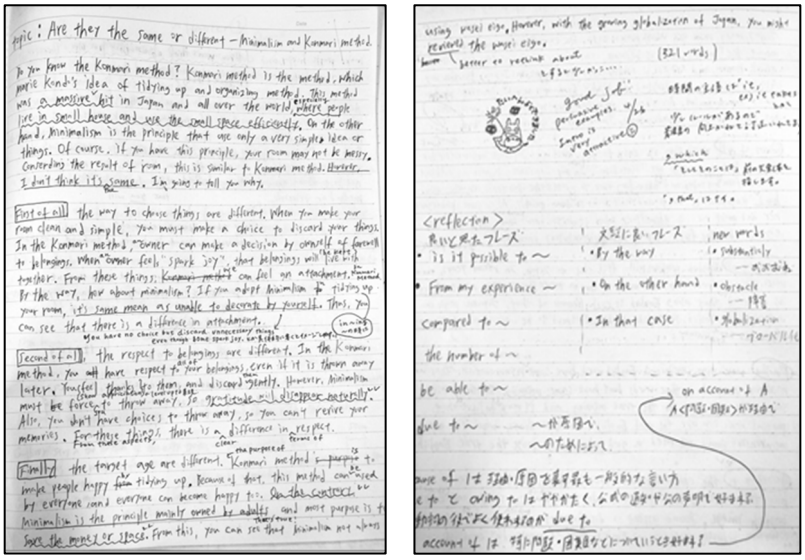

図 11　①エッセイ添削の例（Basic クラス）

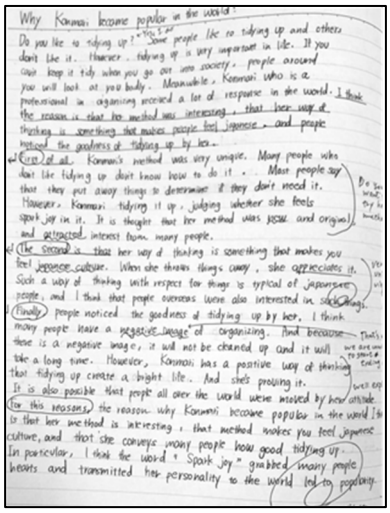

図 12　②Unit Summary / Reflection Essay の例（Basic クラス）

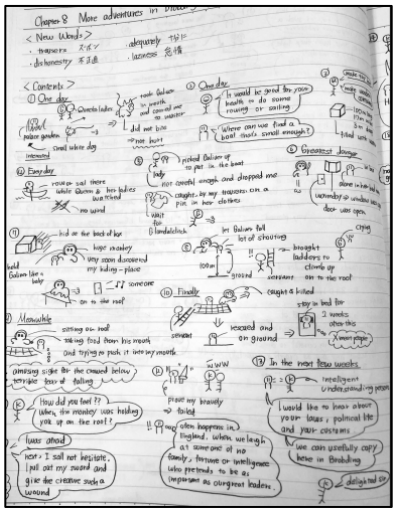

図 13 Reading Log の例（Basic クラス）

図 14　④文法問題演習の提出ならびに
⑤ポートフォリオ提出の Rubric の例（Core クラス）

図 15　⑤Reflection Sheet の例（Core クラス）

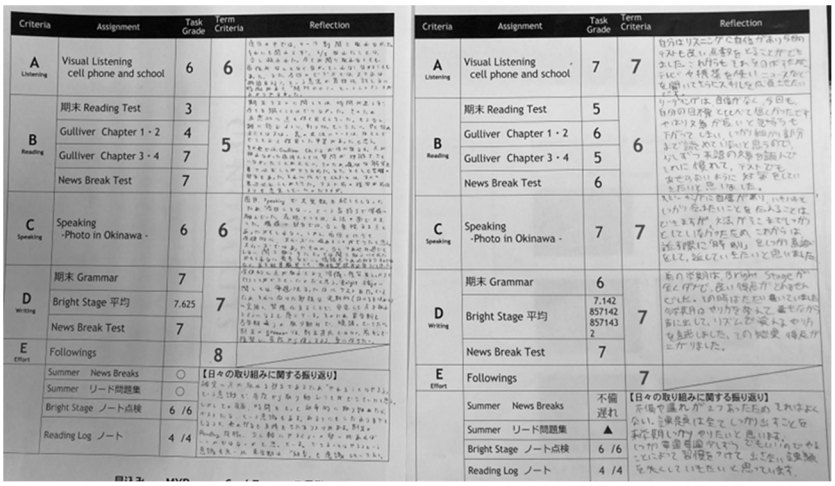

図 16　⑤Report Card の例（Basic クラス）

（文責：手塚史子，前田健士）

３章　実践の振り返りと今後の課題

上記にまとめたように, 本校外国語科の取り組みとしては, 様々な活動を Effort として組み入れ, 専用のルーブリックを提示した上で客観的評価を行うよう努力をしている状況である。これらの実践を経ての提言は，Effort を授業内の生徒参加ととらえるのみでなく，日々の積み重ねとしてとらえることで継続的な個別指導が可能になるということである。また，それぞれの課題に対するフィードバックを出し，数値化することで,「主体的参加」というあいまいな観点を客観的事実に基づく生徒の取り組みの様子で評価することができる。

このことにより, 生徒は自分の取り組みを振り返り, その後の改善に生かすことができる。また, それぞれの課題の評価基準を明確に目にすることにより，生徒は教師が意図するガイドラインに沿って学びを継続することができ，個人の学習目標に向かって取り組むことが出来る。これらは，指導者側にとっても指導改善の示唆となりうるものである。

今後の課題としては，後期課程の新しいカリキュラムや評価に沿って，今後この Effort を各評価観点にどのように組み込むか・換算表をいかにして作成するかという点が挙げられる。この点については，長らく議論をしており現在も試行段階である。

（文責：手塚史子）

An Approach to IB Part 2

－Assessments Examples for New Curriculum Guidelines for “Active Attitude toward Learning”－

Abstract

In addition to the four criteria of IB Language Acquisition (A: Listening, B: Reading, C: Speaking, and D: Writing), the Foreign Language Department has been assessing middle school students with Criterion E: Effort. With the revision of the curriculum guidelines for middle school and high school, the assessment criteria have been reorganized into the following three: “knowledge and skills,” “thinking, decision-making, and expression,” and “active attitude toward learning.” The purpose of this document is to present examples of assessment tasks and criteria for Criterion E: Effort implemented this year at our school for grade 7-10, this being the first time for high school (grade 10).

Through actual examples, we hope to demonstrate how, by quantifying the otherwise indefinite element of "active participation" in Criterion E: Effort, we can sustainably and objectively assess it, so that not only can students reflect on their own effort, but also instructors can use those results to improve their own teaching.

Further study is necessary to examine the consistency and practicability of the assessment of “active attitude toward learning” and Criterion E: Effort in accordance with the new high school curriculum and assessment.